

高校生

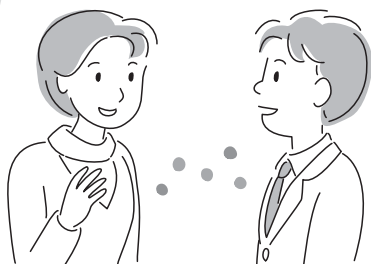
との対話

握手で始める「授業開き」

高校一年生の四月の最初の授業。生徒たちは背筋を伸ばし、コチコチ状態でこちらを見つめています。そのコチコチがこちらにも伝染するようで、私の第一声も上ずったりします。しかし、そこを踏ん張り、「授業開き」を始めます。

「授業開き」の表のねらいは二つです。一つは、「高校の先生なのに身近で話しやすいそう」と感じてもらうこと。もう一つは、「この授業は興味を持ってそう」と思ってもらうことです。

種蒔きは「授業開き」から



公立高等学校教諭

矢代 幸子

やさしい さちこ いつも変わらないところにあるだけ。存在はみんなが知っていて、必要な人だけが安心してやって来る赤いポスト。最近懂れています。

「最初なので、フルネームで呼名しますね。読み方が間違っていたら教えてください」と言いながら、私は教壇を降りて生徒の机のそばに行き、一人ずつ名前を確認したあと、「よろしくね」と言いながら握手をします。

「読み方が間違っていたら……」と言う

ものの、下調べは完璧にしておきます。ですから確認というのは口実で、近い距離での個別の挨拶というのが本当の目的です。他の先生方と違うやり方に生徒は最初驚いた様子を見せますが、次第に緊張がほぐれ、クラスに笑顔の波が広がっていくのがわかります。

「よろしくね」と私が差し出した手を緊張しながら握り返してくれる生徒。「よろしくお願ひします」と照れくさそうに言葉を添えて握手を返してくれる生徒。元来よく両手で握り返してくれる生徒。そんな中に、下を向いたまま私の手に触れるだけの生徒もいます。入学時の不安が高い生徒の見守りも、ここからスタートです。

全員と握手しての呼名が終わったあと、「私と握手して何か感じたことや、気づいたことがありますか」と全員に尋ねます。「優しいそうだな先生だと思いました」「面白くて親しみやすいそう」などと肯定的な答えが返ってきます。そこで、「優しいそうではありません。安心してください。優しいんです」などとアイスブレイキングを

進めながら、次のように尋ね、挙手を求めます。

まず「私の手を温かいと感じた人？」、次に「私の手を冷たいと感じた人？」、最後に「そんなこと何も感じなかった人？」。

人数の多少はありますが、必ず三つのグループに分かれます。それを確認してから、

「あれ？ 私の手は一つなのに、どうして温かいとか冷たいと感じた人がいたのかな？」

と全員に尋ねます。生徒は少し考えてから、「自分の手と先生の手の温度差で、いろいろに感じるんだと思います」という答えを返してくれます。

「そっだよね。温かい・冷たいは私の手の温度ではなく、みんなの手の温度がポイントなんだよねえ」

こんなふうに確認すると、生徒は「へえー」と隣の生徒と顔を見合わせたり、じつと自分の手を見たり、なかには知り合いの生徒と握手を始める生徒も出てきます。

そんな動きを見守ったあと、こうまとめます。

「温かな手、冷たい手があるのではなく、温かいと感じる自分、冷たいと感じる自分がいたんだね。だとすれば、つまらない学校や楽しい学校があるのではなく、つまらないと感じる自分や楽しいと感じる自分がいるだけなんだね。さあ、これからの一年、授業を通じていろいろな自分と出会っていきましょう」

コチコチで不安げな表情だった生徒たちの目が、少しずつ輝き始めます。

生徒が「主体としての自分」を意識して授業にのぞむ下地づくり、これが「授業開き」の真のねらいです。そしてこのやりとりはことあるごとにその後もずっと続いていきます。

「もうムリー」

課題を出した途端に「こんなにたくさん課題、もうムリー」とすぐに反応する生徒がいます。そんなとき、すかさず「無理な課題があるのではなく、無理と感

じる何がいるんだっけ？」と言って一拍待っていると、周囲から「無理と感じる自分」という声が飛んできます。すると、ふくれっ面で「ムリー」と叫んでいた生徒に笑顔が戻り、

「やっぱりな。先生はそう言うと思った。でも、そう言われると、しようがない、やるかっていう気になるんだよね」と、やる気とあきらめが半々に入り混じったような言葉が返ってきます。

その声に、私はかなりオーバーに「うれい！ 応援してるよ」と返すのです。

「先生、握手」

清掃が終わってテニスラケットを手にしたA子に、「最近、ちょっと元気がないかなと思っていたけど、今日はこれから部活？」と声をかけると、

「先生、気づいてたの？ ちょっと部活の仲間との関係がこじれちゃって……。部活を辞めようと思っていたんだけど、嫌なやつがいるんじゃないかって、嫌だと感じていた自分があるんだ」っていう先生

の言葉を思い出したの。それで気分を変えて、その人のことを見てみたら、いいところが見えてきたの。ビックリしちゃった。私はテニス好きだし、やっぱり部活辞めたくないからまた頑張ります」

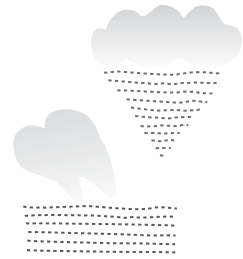
と言、「先生、握手」と手を出してきたのです。その手を握り返すと、「やっぱり先生の手、あったかいや」と笑いながら教室を出て行きました。

私には、A子の言葉が温かく残りま

「握手の力」

「授業開き」は私からの言葉で始まるので、三月の「授業閉じ」は生徒から言葉してもらいます。一年間の授業を振り返り、アンケートに答えてもらうのです。

生徒は印象に残った教材とその理由、そしてこれらの教材を通じて考えたことや、新しく出会った自分についてなどをまとめていきます。自由記述欄も設けてあるのですが、B男はそこに「握手の力」と書いてありました。



B男は欠席がちで、二学期末には進級も危ぶまれたのですが、三学期は休まず登校し、無事進級が決まった生徒でした。

「握手の力」という言葉が気になったのでB男にその意味を聞いてみました。

そばには、同じ中学校出身のC男がいました。

「冬休み、閉じこもっていた俺に、C男が連絡をくれて、会ったんです。そしてらC男が俺の手を握って、『僕の手は温かい？ 冷たい？ 温かいって感じるか、冷たいって感じるかは、お前次第なんだよな』って言ってくれたんです。

俺は、酒を飲んで怒鳴ってばかりいる父親が大嫌いで、勉強する意味もわかんないし、だんだん学校もつまんなくなっちゃって……。だから学校休んで家に閉

じこもっていたんです。

でも、C男の言葉を聞いて、父親や学校のせいにして逃げていたのは自分だったって気がついたんです。それで、三学期は頑張って学校に来てみたんです。最初は朝起きるのがつらかったけど、だんだん学校が楽しくなってきました。家に閉じこもっているのにも飽きてきてたし。だから、進級できたのはC男の握手のおかげなんです」

C男は、B男の話を照れくさそうに聞いていました。「授業開き」の握手で蒔いた種は、生徒たちの中で大きく育つてくれたようです。

「かっこいいぞB男。かっこいいぞC男」と私は心の中で呟きながら、ちょっと大人びた二人の照れ笑いを見つめていました。

「授業閉じ」が終わったと思ったら、またすぐ「授業開き」の季節。コチコチ生徒たちを前に、自分の声が上がらないか少し心配しながらも、どこか待ち遠しい季節なのです。